

アフリカの若者に明るい未来を生み出す、土のう

NPO 法人道普請人（みちぶしんびと）は、自分達の道は自分達で直す、という意識を広めたいとの趣旨でアフリカで活動をしています。

人々の生活道路は未舗装で雨季になると水たまりができ、泥田状態になります。車両、バイク、人の通行が困難で、市場や学校、病院へのアクセスが絶たれます。行政による整備は待てども実施される様子がありません。

そこで現地で調達できる材料を使い人力で道路を整備する手法を、沿線の住民に技術移転をしています。土のうを利用します。穀物、肥料、砂糖、セメントなどの袋を土のう袋として使い、ある一定量の土を入れて所定の位置で口部を縛ります。均一な大きさの土のうを作成します。人力で重石のようなもので土のうを叩くことで締固まり、まるで石のように固くなります。こうして、車の重さを十分支えることができる路盤が出来上がります。土のう袋が破れないようにするため、表層として土で土のう表面を覆います。同時に周りからの排水や降った雨水が路面に滞留しないよう、排水施設や路面の勾配も整備します。機材を一切使わず、単純で簡単、効果が目に見えてすぐにわかります。

ケニアの意欲ある若者たちはこの手法を身に着けると、自分達のグループを道路施工業者として登録しました。コミュニティや小規模施工業者により土のう工法が運用されれば、これまで整備が進まなかった農道状態が改善されるのです。ケニア道路行政は、道路整備5か年計画（2013年から2017年）の中で土のう工法の採用を明言しました。

土のう工法を身に着けた若者は道路整備を請負い、道路整備のビジネスに参画し始めます。彼らの明るい未来につながります。



ケニアで道路整備の様子

より多くの量の収穫物を市場に運べるようにしたいという農家グループに、土のう工法の研修をしました。ある一家は道路状態がよくなり現金収入が増えたことで、労働者を雇うことができるようになりました。これまで手伝いをしていた息子は、学校に行けるようになったのです。

この活動を国内・国際機関の助成や委託を受けて、NGO 登録しているケニアを中心とした東アフリカ諸国で実施しています。土のう工法を身に着け BOP 層の中から事業家が出てくるような仕組みづくりの活動をガーナで行いました。モザンビークでは道路管理局が土のう工法に関心を示し、その期待に沿うべく現地活動を開始しています。

土のう工法は斜面地で平場をつくるための擁壁や、ダムの堤体、護岸と多くの簡便インフラ構造物への適用が可能です。ケニアでは現地で NGO 登録をし環境保全事業として、造成された平場での苗木育成、植林、その育成に必要な水確保のためのため池堤防建設などの活動を、住民参加で行っています。

これまでにアフリカ 10 か国、約 20 km の道路を土のうで整備しました。本団体活動は安倍首相のアフリカ連合での「一人ひとりを強くする日本のアフリカ外交」という演説で、「若者に明るい未来を」の章で「格好の実例」として紹介されています。

NPO 法人として活動趣旨の実現に向けて組織基盤を固め、臨機応変かつ柔軟に他機関と連携をとりながら、アフリカでの活動を展開していきます。



タンザニアでの道路整備の様子